

令和2年度における宮城県長期欠席状況調査（公立小中学校）の結果について（速報）

1 調査の趣旨

令和2年度における児童生徒の長期欠席の状況等を調査・分析することにより、不登校支援に向けた実効性のある施策の立案につなげていくものとする。

2 調査対象期間

令和2年4月1日から令和3年3月31日まで

3 調査対象（令和2年5月1日現在）

(1) 児童生徒調査

- 県内公立小中学校長期欠席児童生徒（仙台市を除く） 2,771人
  - ・小学校 1,012人
  - ・中学校 1,759人

(2) 学校調査

- 県内全公立小中学校（仙台市を除く） 384校
  - ・小学校 250校
  - ・中学校 134校

4 回答方法

児童生徒調査，学校調査ともに質問紙法による学校の回答  
 （児童生徒調査については，担任をしていた教師等の見立ての回答）

5 調査結果の概要

(1) 長期欠席の概要について（R2年度とR元年度比較）

- 長期欠席児童生徒数は，昨年度と比較して小学校で33人の増，中学校で31人の減である。
- 不登校は，小学校で18人の増，中学校で60人の減であり，中学校の減少が顕著である。
- そのうち90日以上欠席の不登校は，小学校で64人の増であり，中学校で72人の減である。

(2) 平成30年度から令和2年度における長期欠席児童生徒の状況について

区分 校種	長期欠席児童生徒（人）														
	病気		経済的 理由		30日以上 欠席		不登校			新型コロナ ウイルスの 感染回避		その他		総計	
							(内数) 90日 以上欠 席	(内数) 出席10日 以下	(内数) 出席0						
小学校	R2	145	14.3%	1	0.1%	694	68.6%	282	49	15	98	9.7%	74	7.3%	1,012
	R元	230	23.5%	1	0.1%	676	69.1%	218	45	17			72	7.4%	979
	H30	281	31.4%	0	0.0%	548	61.4%	191	25	8			64	7.2%	893
中学校	R2	191	10.9%	0	0.0%	1,502	85.4%	855	196	49	35	2.0%	31	1.8%	1,759
	R元	187	10.4%	0	0.0%	1,562	87.3%	927	195	59			41	2.3%	1,790
	H30	188	10.5%	0	0.0%	1,573	87.6%	923	161	42			34	1.9%	1,705
R2小中合計		336	12.1%	1	0.04%	2,196	79.2%	1,137	249	64	133	4.8%	105	3.8%	2,771
R元小中合計		417	15.1%	1	0.04%	2,238	80.8%	1,145	240	76			113	4.1%	2,769
H30小中合計		469	17.5%	0	0.00%	2,121	78.9%	1,114	186	50			98	3.6%	2,688

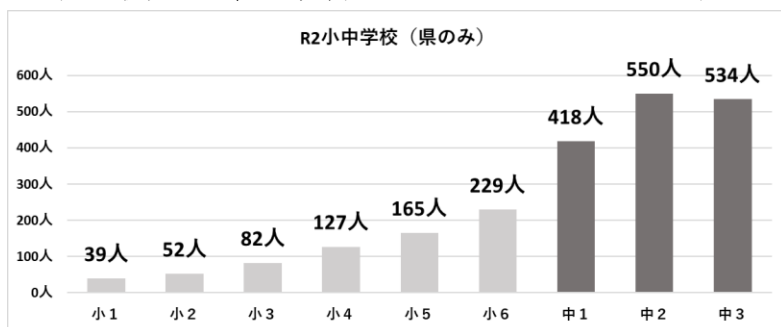
## 6 不登校児童生徒の状況について（児童生徒調査）

(1) 令和2年度における不登校児童生徒の状況について（学校が回答した不登校児童生徒の個々の状況）

### ① 不登校児童生徒の学年と不登校のきっかけと継続要因について

〈不登校児童生徒の学年〉

(単位：人)



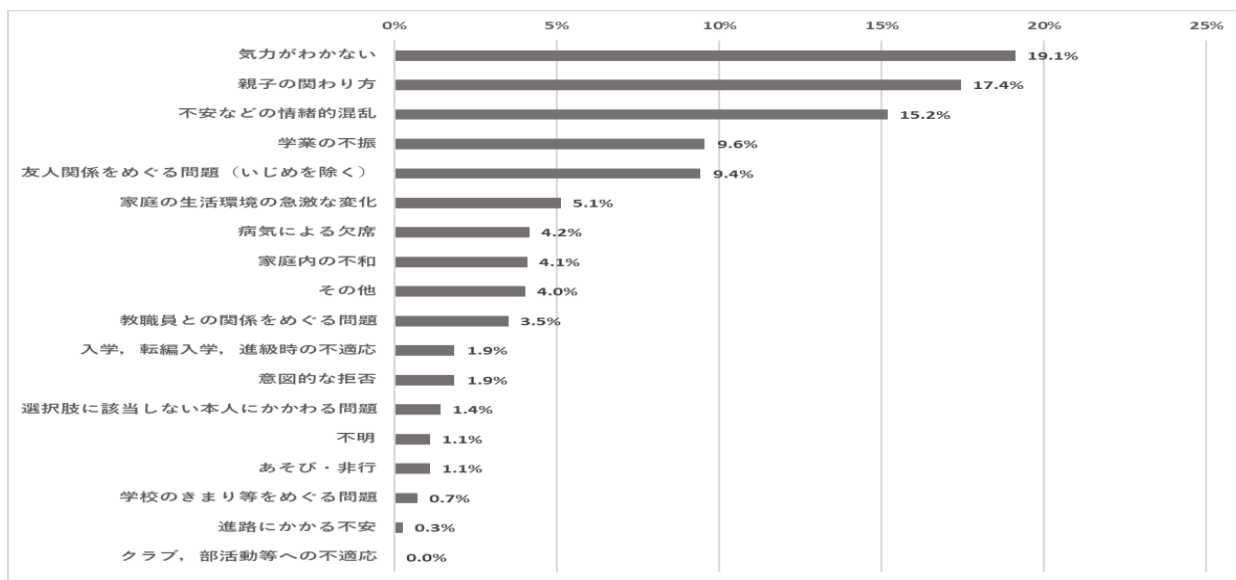
#### 【不登校児童生徒の現状】

- 小学1年生から小学6年生まで、学年が上がるにつれて、不登校児童数が少しずつ増加している。
- 中学1年生で不登校生徒数が急激に増加し、中学3年生でやや減少している。

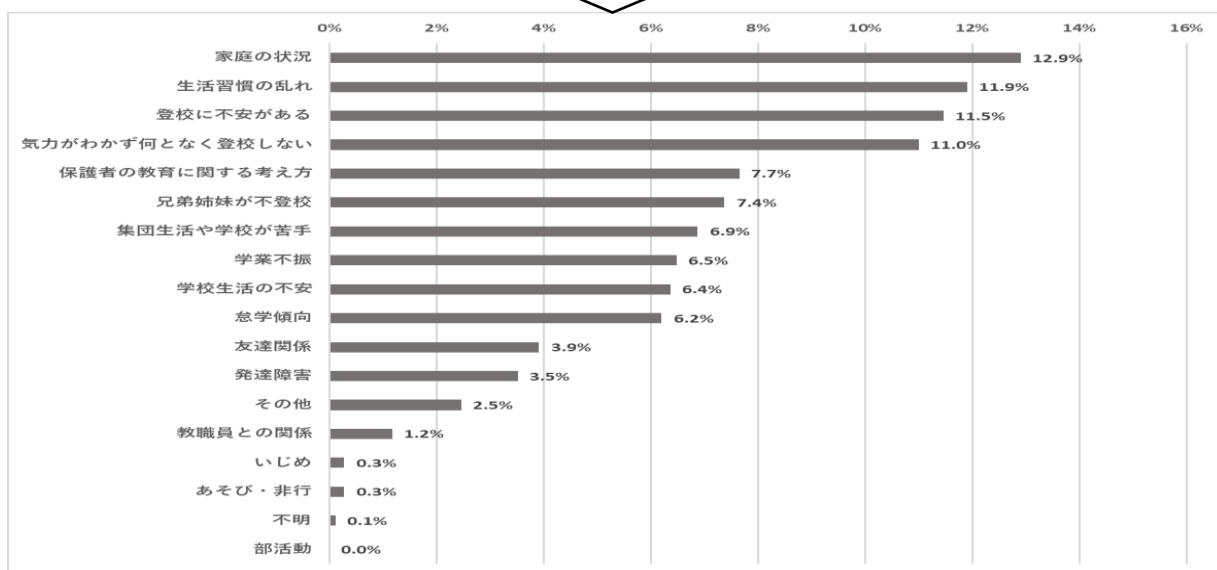
〈不登校のきっかけと継続要因〉

#### 【小学校】

[きっかけ]※複数回答可

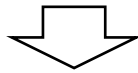
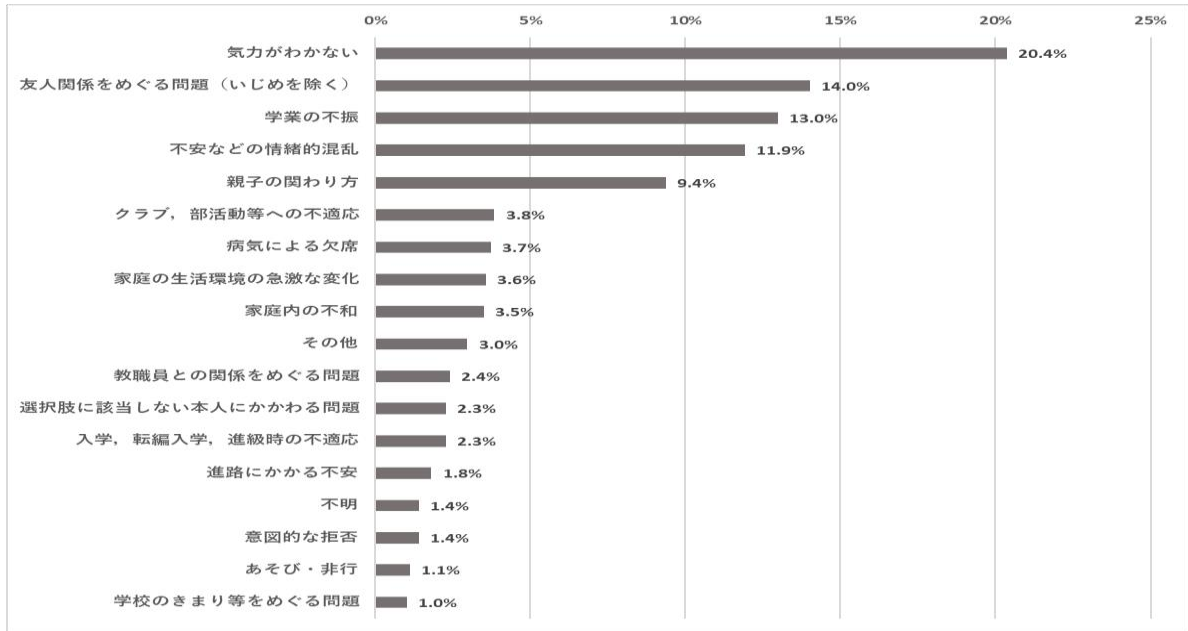


[継続要因] ※3つまで選択可

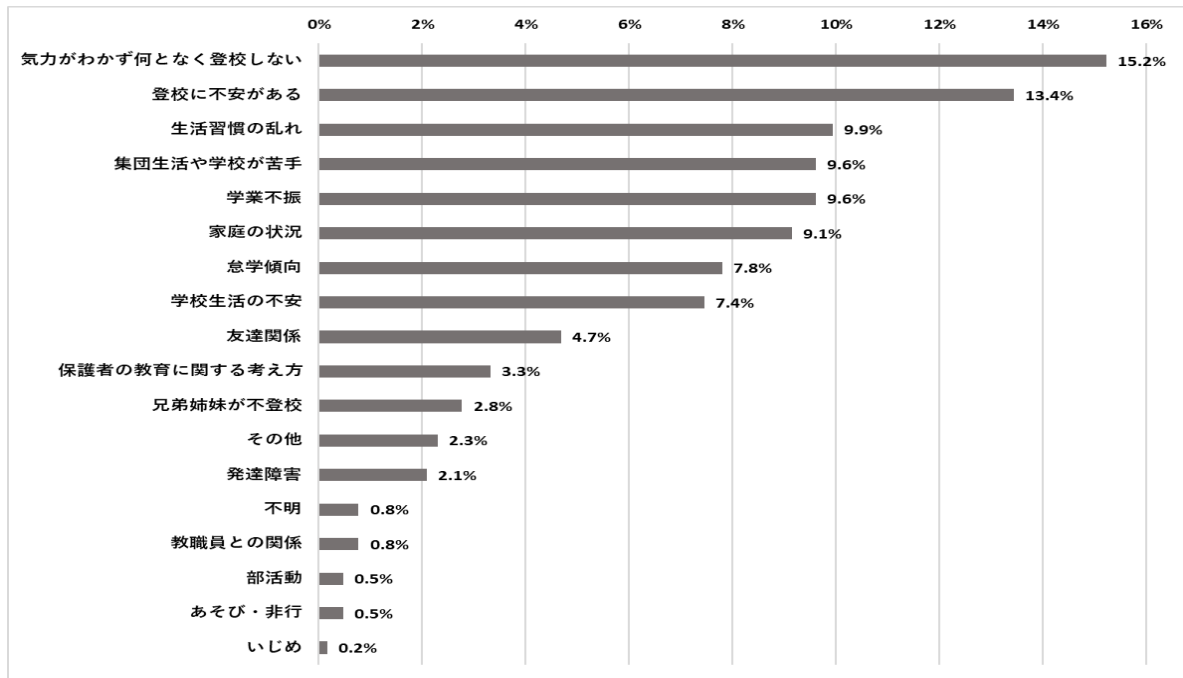


【中学校】

[きっかけ] ※複数回答可



[継続要因] ※3つまで選択可



【不登校のきっかけ】

- 小学校では「気力がわかない」や「親子の関わり方」,「不安などの情緒的混乱」が多い。
- 中学校では「気力がわかない」や「友人関係をめぐる問題（いじめを除く）」,「学業の不振」が多い。

【不登校の継続要因】

- 小学校では「家庭の状況」や「生活習慣の乱れ」,「登校に不安がある」が多く、主に家庭や本人に係る要因が多い。
- 中学校では「気力がわかない」や「登校に不安がある」,「生活習慣の乱れ」が多く、本人に係る要因が多い。

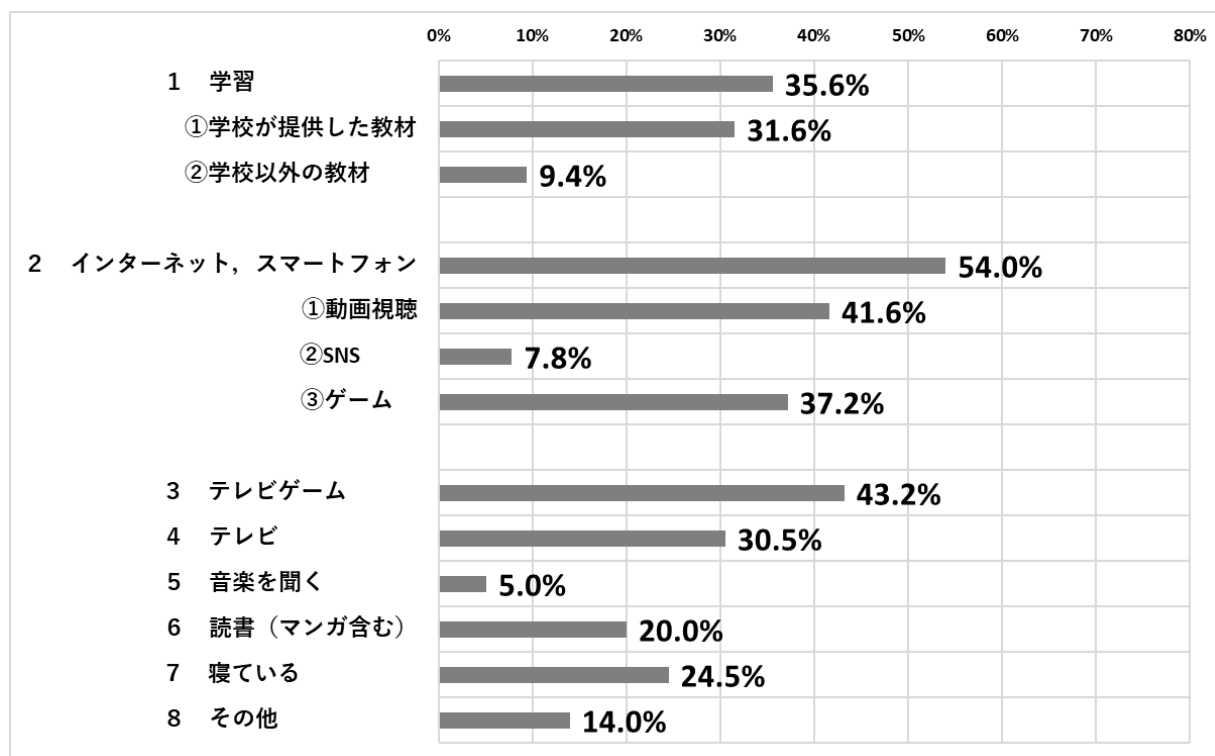
② 不登校になったきっかけに対する不登校が継続している要因について

	不登校のきっかけ	不登校が継続している要因（上位3項目、複数回答）		
小学校	1 気力がわかない	①気力がわかず何となく登校しない	②生活習慣の乱れ	③家庭の状況
	2 親子の関わり方	①家庭の状況	②生活習慣の乱れ	③保護者の教育に関する考え方
	3 不安などの情緒的混乱	①登校に不安がある	②学校生活の不安	③集団生活や学校が苦手
中学校	1 気力がわかない	①気力がわかず何となく登校しない	②集団生活や学校が苦手	③生活習慣の乱れ
	2 友人関係をめぐる問題（いじめ除く）	①登校に不安がある	②友達関係	③集団生活や学校が苦手
	3 学業の不振	①学業不振	②気力がわかず何となく登校しない	③登校に不安がある

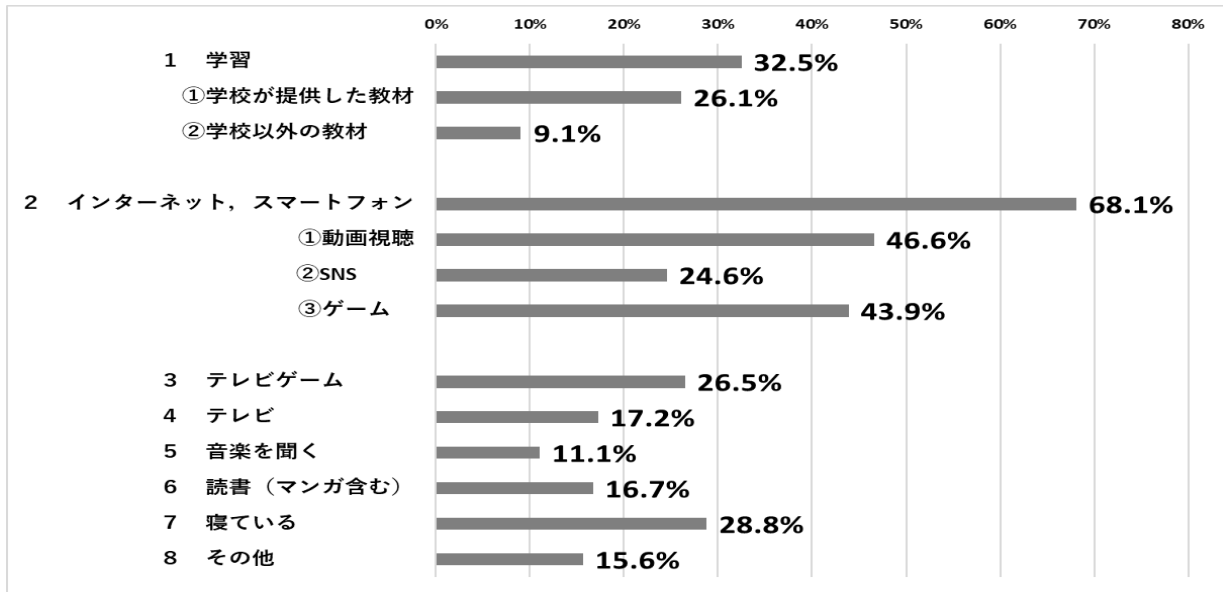
- 小学校で「気力がわかない」がきっかけで不登校になった児童が多く、「気力がわかず何となく登校しない」「生活習慣の乱れ」「家庭の状況」が要因で不登校が継続している。
- 中学校では「気力がわかない」がきっかけで不登校になった生徒が多く、「気力がわかず何となく登校しない」「集団生活や学校が苦手」「生活習慣の乱れ」が要因で不登校が継続している。

(2) 家庭での過ごし方 ※学校がある昼の時間帯に主に何をしているか。（3つまで選択可）

【小学校】



【中学校】

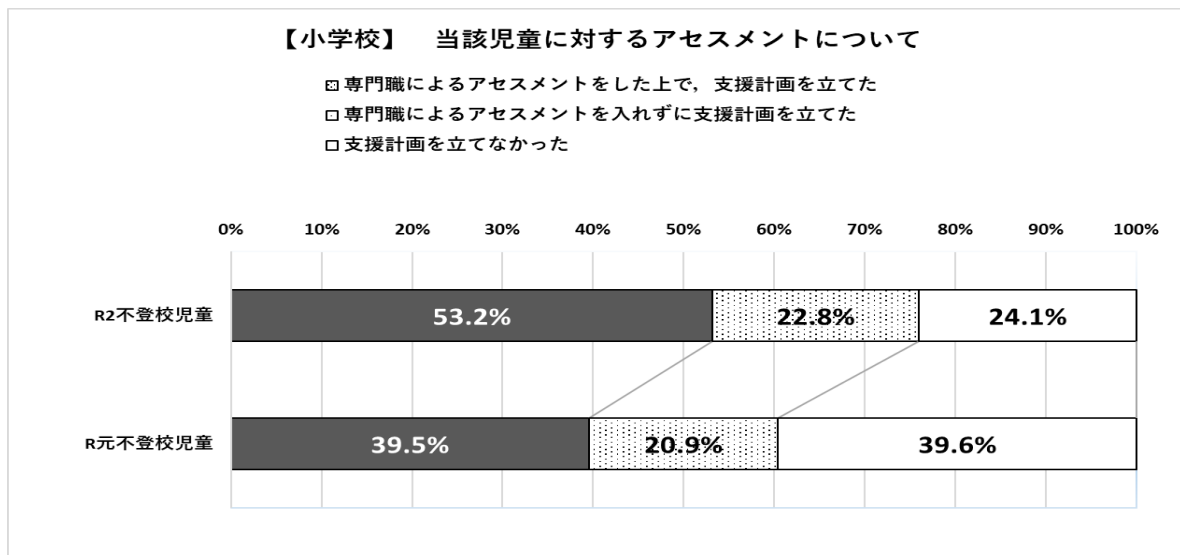


- 小中学校ともに、インターネット、スマートフォンが最も多い。
- 小中学校ともに、学習している割合が約30%、昼の時間帯に寝ている割合が約25%である。

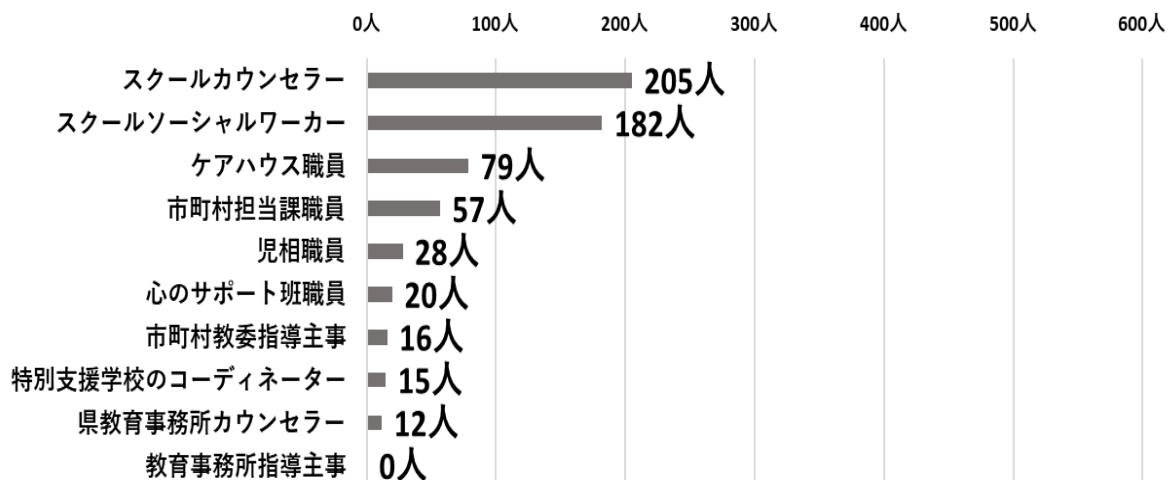
(3) 不登校児童生徒に対するアセスメント（見立て）について

- アセスメントに基づいて支援計画を立てた割合は、小学校が76.0%、中学校は、75.5%である。その内、専門職によるアセスメントを基に支援計画を立てた小学校が53.2%、中学校は56.5%である。
- 専門職の内訳は、スクールカウンセラーが最も多く、小学校では205名、中学校では542名、スクールソーシャルワーカーは、小学校で182名、中学校では360名が支援計画作成に関わった。その他の専門職として、みやぎ子どもの心のケアハウス職員や市町村担当課職員などが挙げられた。

【小学校不登校児童】（694人中）



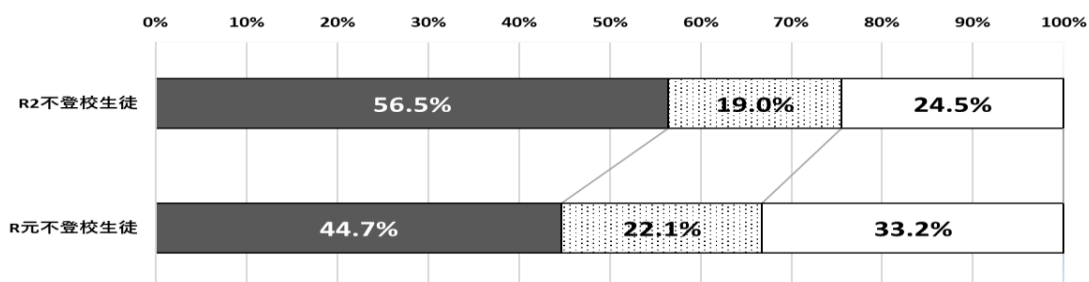
【小学校】 アセスメントに関わった専門職（複数回答）（人）



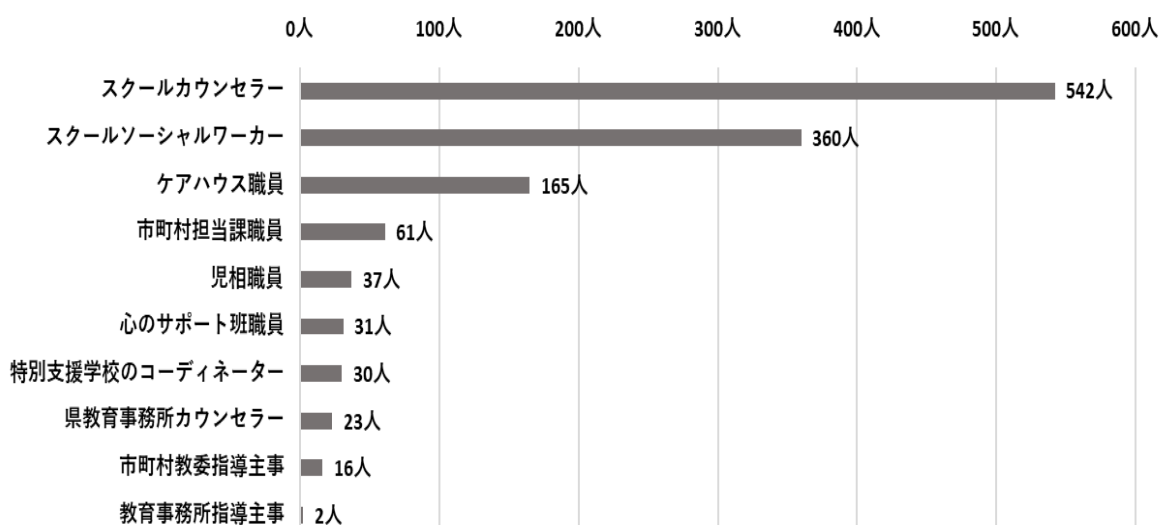
【中学校不登校生徒】（1,502人中）

【中学校】 当該生徒に対するアセスメントについて

- 専門職によるアセスメントをした上で、支援計画を立てた
- 専門職によるアセスメントを入れずに支援計画を立てた
- 支援計画を立てなかった

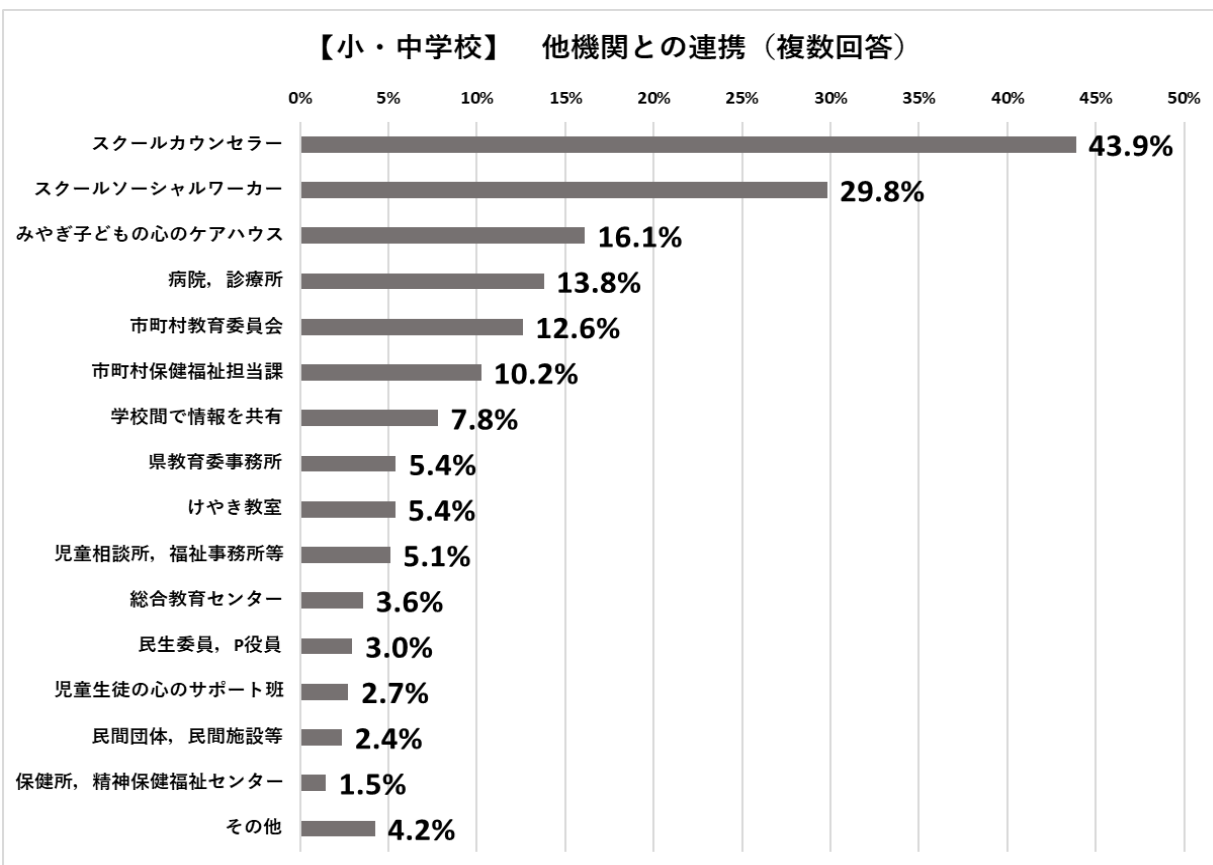
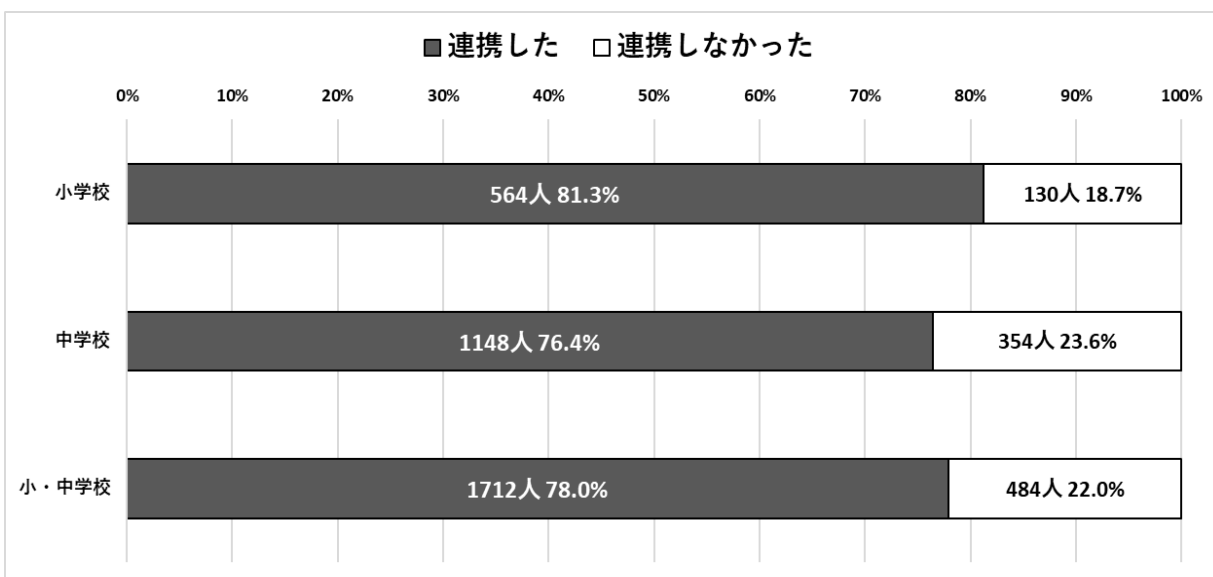


【中学校】 アセスメントに関わった専門職（複数回答）（人）



#### (4) 学校における他機関等との連携について

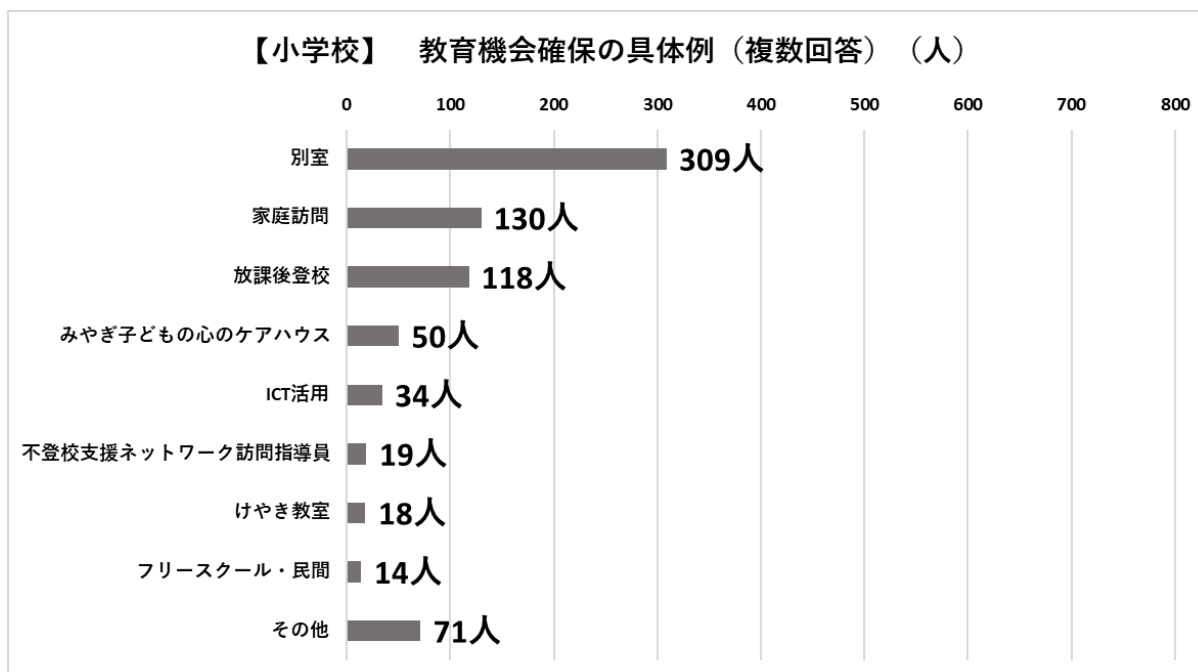
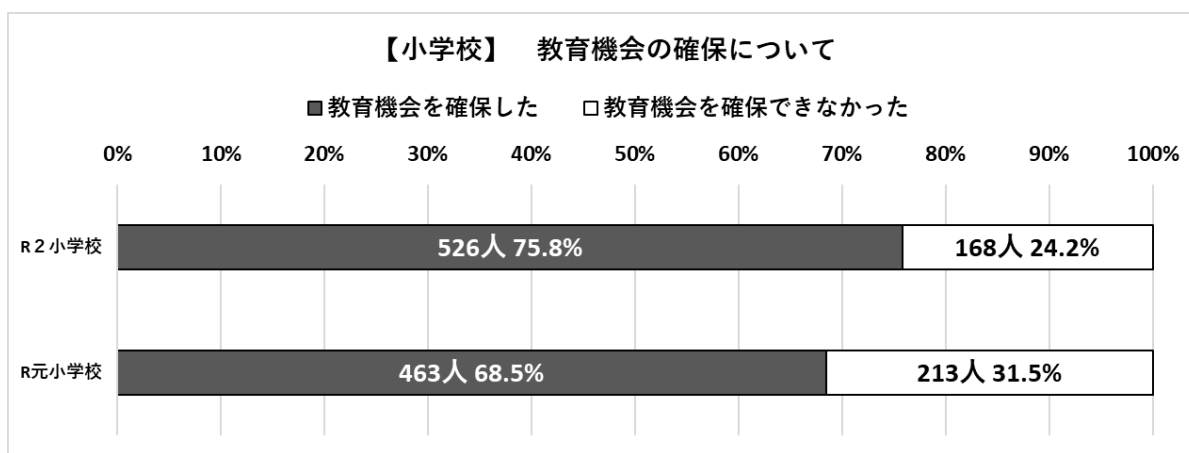
- 小学校不登校児童 694 人中、学校が他機関等と連携していたのは 564 人 (81.3%)。連携していなかったのは 130 人 (18.7%) である。
- 中学校不登校児童 1,502 人中、学校が他機関等と連携していたのは 1,148 人 (76.4%)。連携していなかったのは 354 人 (23.6%) である。
- 小学校及び中学校不登校児童生徒の他機関等との連携先の上位は共に「スクールカウンセラー」や「スクールソーシャルワーカー」「みやぎ子どもの心のケアハウス」である。



(5) 教育機会確保法に基づく、多様な教育機会の確保について

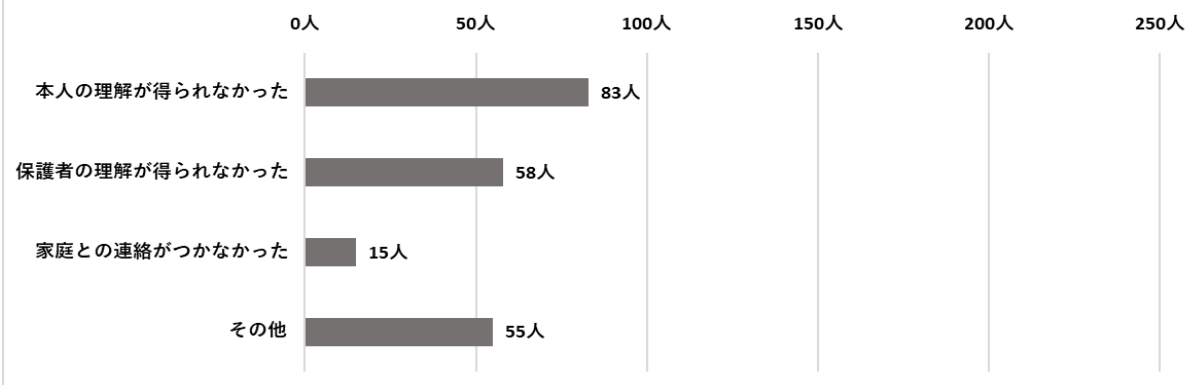
- 小学校では、75.8%の児童の教育機会が確保されており、具体例としては別室での学習が最も多く、次いで家庭訪問や放課後登校が挙げられる。「その他」としては、「登校したときに授業に出ていた」などが多かった。
- 中学校では、79.2%の生徒の教育機会が確保されており、具体例としては、小学校同様、別室での学習が最も多く、次いで家庭訪問や放課後登校が挙げられる。その他としては、「登校したときに授業に出ていた」などが多かった。
- 小中ともに、確保できなかった理由としては、「本人の理解が得られなかった」が最も多い。

【小学校】



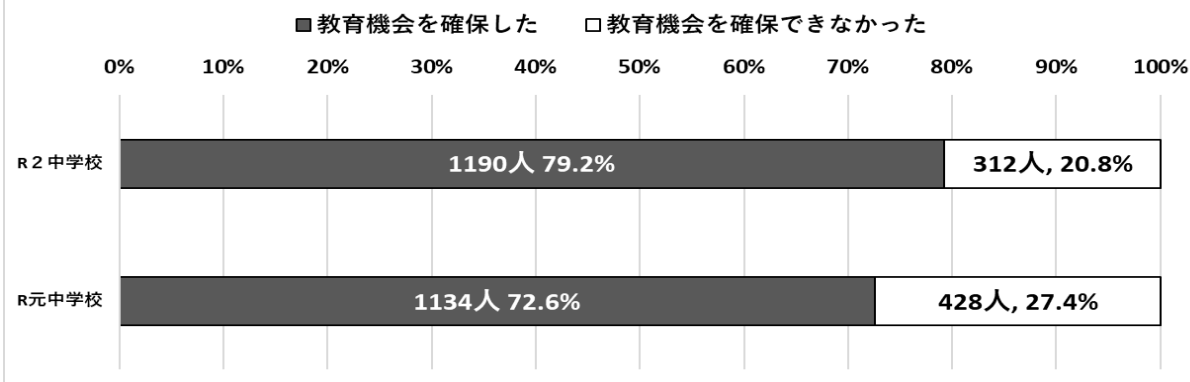


【小学校】 教育機会を確保しなかった理由（複数回答）（人）

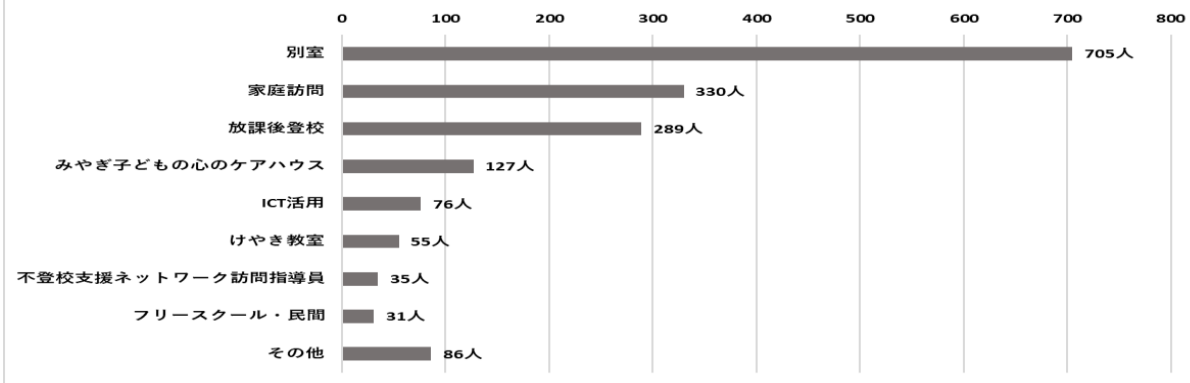


【中学校】

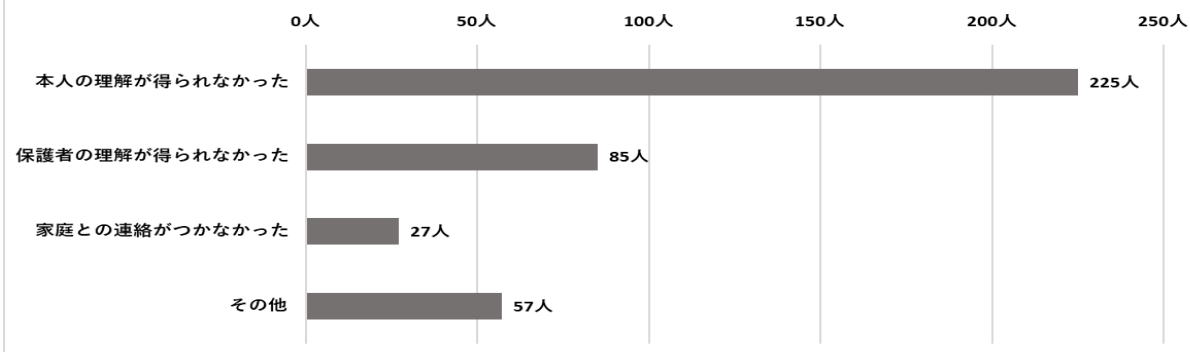
【中学校】 教育機会の確保について



【中学校】 教育機会確保の具体例（複数回答）（人）



【中学校】 教育機会を確保しなかった理由（複数回答）（人）



## (6) 校内での取組について

- 小学校では、電話や迎えに行くなどの登校を促しているが70.2%と最も多く、研修会や事例研究を通じて全教師の共通理解を図ったが次に多かった。
- 中学校では、生徒に対して電話や迎えに行くなどの登校を促しているが67.1%と最も多く、研修会や事例研究を通じて全教師の共通理解を図ったが次に多かった。
- 小中ともに、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー、相談員の支援、別室登校による支援が増えている。また、個票の活用も徐々に増えてきている。

### 【小学校】 当該児童生徒に対する学校の取組



## 【中学校】 当該児童生徒に対する学校の取組

